

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

**\* 大正14年9月15日の地図に東京天文台の表記発見**

もう10年になるであろうか、ひょんなことから大正から昭和にかけて東京天文台で太陽の観測をされていた井上四郎氏のお孫さんと知り合い、貴重な資料を数多くいただいた。その中に平成20年10月22日消印の井上四郎のお孫さん「堤 絢子」さんからの封筒に入った資料に古い地図の束があった。これらは戦前の日本が大東亜共栄圏を掲げていたころのものであり、大きさを示してあるがかなり大判のものが多い。地図は17点あり以下のとおりである。

- 1) 東京日日新聞昭和6年1月1日号付録「大日本新名勝遊覧地図」鐵道省監修、  
78.3x109.5cm
- 2) 東京日日新聞大正14年1月1日付録「大日本交通全図」鐵道省校閲  
全国鐵道一万里記念、109x78.3cm
- 3) 東京日日新聞社撰「東亜現勢大地図」附ヨーロッパ州・世界現勢図  
昭和13年9月1日発行、78x109cm
- 4) 東京日日新聞社編「東亜現勢鳥瞰図」昭和13年4月22日発行、78.5x55cm
- 5) 東京朝日新聞社発行「エチオピア及隣接英仏伊植民地最新地図」  
昭和10年10月1日発行、54x39cm
- 6) 江蘇浙江交通明細地図(上海、陸海軍部乾漆納入品)、77x103cm 袋入り  
附録：上海・南京・杭州各市街地図 昭和12年8月25日発行 定価金九十銭  
発行所 上海日本堂 定価 金九十銭
- 7) 最近支那大地図 附録満州国図 昭和12年7月20日発行、78.5x109cm  
発行所 文彰堂 定価 金七十銭 袋入り
- 8) 国民新聞社編「大東亜共栄圏地図」(太平洋要図)、54.5x77cm  
大東亜ノ聖戦付図 昭和16年12月23日発行
- 9) 富士新年号附録 便利で見易い実用形「時局重要地図」帝国地図学館編
  1. 支那經濟・交通総図 25x28cm
  2. 支那重要地經濟・交通図 25x28cm
  3. 満州国經濟・交通図 25x22cm
  4. 満ソ東部国境詳図 42.5x25cm
  5. 最新ソヴィエト聯邦全図 39x25cm
  6. ヨーロッパ州全図 25x26cm
  7. 中部ヨーロッパ明細図 29x25cm
  8. 北部支那 61x25cm

9. 中部支那 64x25cm

10. 南部支那 70.5x25cm

- 1 0) 東京日日新聞社編「世界現勢大地図」昭和 11 年 11 月 1 日 77.5x105cm  
(各国の面積が正しい比例に現わされている合理的な図)  
主要国国力比較図、日本貿易圏、中華民国勢力図、日本人分布図、  
主要国人口比較図、欧州各国明細図が含まれている。
- 1 1) 改造「最新世界地図」 和甲書房発行 昭和 10 年 2 月 10 日 各国国旗掲載  
76.5x105cm
- 1 2) 東京日日新聞付録「最新大東京地図」(其二城東) 大正 14 年 11 月 10 日発行  
78x109cm
- 1 3) 東京日日新聞付録「最新大東京地図」(其二城西) 大正 14 年 9 月 15 日発行  
三鷹村大澤に天文台の表記がある。天文台通りはない。78.3x109.0cm
- 1 4) 東京日日新聞付録「大東京最新明細地図」(隣接町村併合記念) 66x116cm  
昭和 7 年 10 月 1 日発行(其二)(其一は来る 11 月 1 日発行とある)  
三鷹村付近は記載がない、狛江村は出ている
- 1 5) 東京日日新聞付録「大東京最新明細地図」(隣接町村併合記念) 66.5x117.5cm  
昭和 7 年 11 月 1 日発行(其一)
- 1 6) 模範「新大東京全図」昭和 8 年 4 月 1 5 日発行 版訂正第 2 版 78x109cm  
文彰堂編集部編纂 定価 金四十銭
- 1 7) 東京日日新聞特撰「最新日満大地図」 昭和 5 年 1 月 1 日発行 109x78cm

これらの地図は一点一点が見ごたえのある歴史的なものである。大日本帝国が中国大陸に侵攻していたころのものが多い。これらの地図を見るのは心苦しい思いもある。そのことはともかく、日本国の戦前の歴史を現した地図である。おそらくこの地図自体は歴史的に貴重なものであり、国立天文台のアーカイブとしてより、ほかに所蔵されるべきものかもしれない。その中であって、13)「最新大東京地図」(其二城西)が筆者には興味深い。この地図は大正 14 年 9 月 15 日発行である。東京天文台は大正 13 年 9 月 1 日に麻布から三鷹村に移転したことになっている。この東京天文台付近を含む地図なのである。三鷹駅はない、そして天文台通りもない。この地図の天文台付近のコピーが図 1 である。

当然ながら、国際基督教大学も、東八道路、調布飛行場もない。この地図の中央あたりを東西に通る道が人見街道である。現在の国際基督教大学の裏門あたりから南西に曲がったあたりに坂上、坂下の表記があり、そのあたりが国分寺崖線を下る坂道であることがわかる。その辺りに上石原と書かれているが調布町の外に書いてある。近藤勇は武州上石原村野水の出である。上石原村野水は細く北に張り出した領域であり、上石原の名は京王線の上石原駅北にも表示されている。西調布駅は、以前は上石原駅と言われていた。上石原村はこの地図ではすでに調布町となっており、上石原村野水は三鷹村と多磨村に挟まれた東西に狭い地域であり、上石原村の甲州街道北部の大部分は調布飛行場になっている。こ

の地図には東京天文台の敷地内にあった長久寺も北に移転しており、八幡神社も人見街道の北に移転している。この地図は東京天文台が三鷹村に移転した直後の地図なのである。

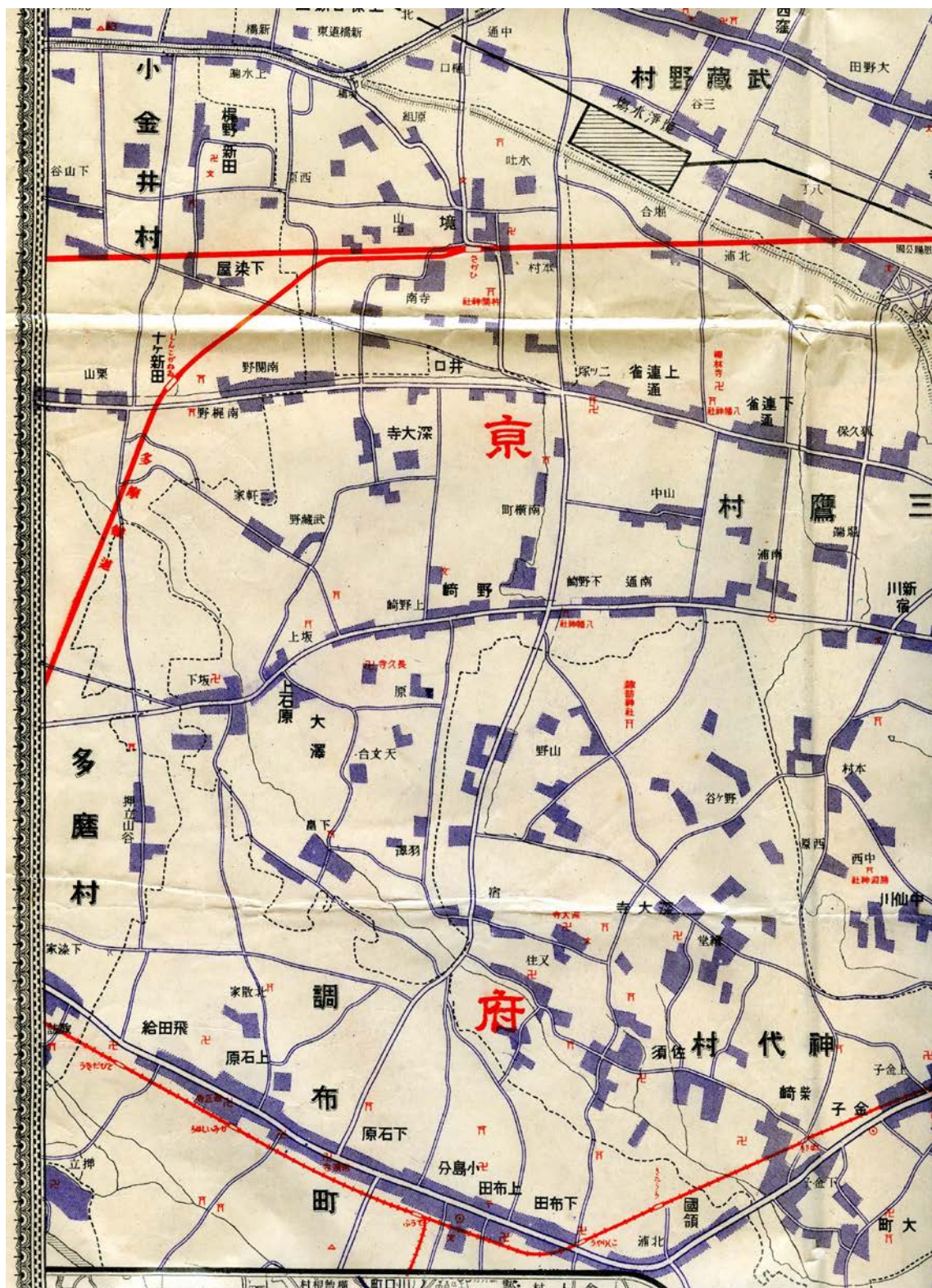


図1 1914年9月15日発行の地図の国立天文台付近

図2がこの地図の凡例である。町村界の点線で上石原村が複雑に北に延びている様子がわかる。この地図には国分寺崖線のがけ地の表記はない。

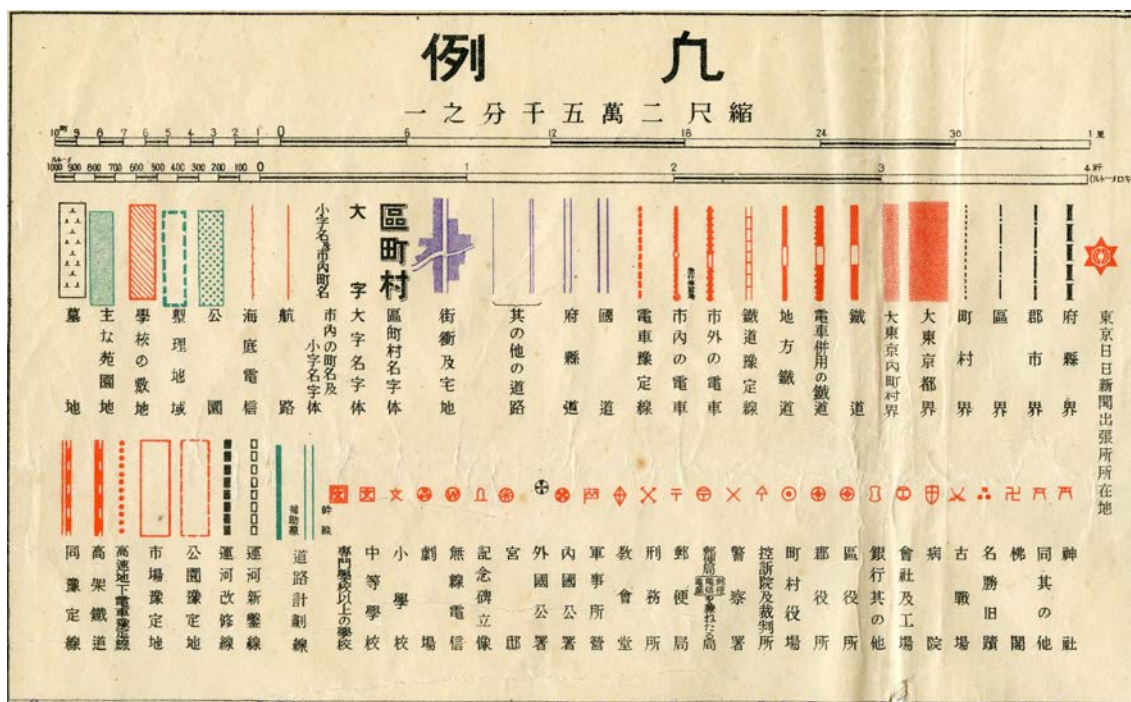


図2 「最新大東京地図」(其二城西)の凡例

筆者は小学生のころから地図を見るのが大好きであった。興味が尽きない。この地図は国立天文台のアーカイブとしても貴重なものと思われる。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)